
結婚してくれ

春告草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚してくれ

【Zマーク】

N1460C

【作者名】

春告草

【あらすじ】

俺の両親は離婚した。離婚して以来母親と生活してきた、母の苦労や努力やドジや…恋を見ながら…愛すべき俺の母親亞沙子の再婚願望を叶えてあげたい子供たちの、母親への応援歌！

俺、龍平。高3。

『結婚してくれ』と言つても、俺の事ではない。母親、亜沙子の事である。

俺の両親は七年半位前に離婚した。理由はお決まりの父親のパチンコ狂と多額の借金。

母親は離婚届けをつきつけ、子供三人を引き取り自分名義で作られてしまつた借金の返済を『債務整理』の手続きをし、一年強でやつてのけた。

「おかげでローンもカードも持てないわ」

と、今は笑つて言えるようになつたが、その頃は会社に勤めながらも休日は仏壇やの店員をし、夜はコンビニで働く…愚痴も言わず俺達を守りながら『必死』なんだという感じは、子供の俺でさえ感じていた。

そしてこれもお決まりのように借金の返済が終わつた途端、体を壊した。その時でさえ

「大丈夫、大丈夫」と笑つていた。

まあここまでよくある話で、そんな苦労話を語りたいわけじゃない。

さて、俺の母親である亜沙子は、そんな苦労をしていても可愛さと若さは何故か保つていて、23才になる姉とは姉妹と思われるほどで自慢の母なのである。

ところが何故なんだろうか…再婚の話しさ一度も聞いた事が無い。それなりに付き合いのある男の話は時々聞いていた。テレビ局のディレクターとか、地元の新聞社の編集長とか、車屋の社長とか…それなりに生活に余裕の有りそうな地位のある人達だった。というのも、亜沙子は通称『FTP』といって、資産や収支のバランスのアドバイスをする仕事をしている。だからそういった『それなり』の人

と知り合つたりしても不思議ではない。

ところが！である。2年前から亜沙子より10才年下の朔哉が我が家に同居を始めたのだ。朔哉の性格が良いことは姉達も俺も認めている。ただ…困った事に稼ぎが…無い。

小さな劇団に所属していて、卖れない役者をしていて、収入が少ない分を派遣で働いている。まあ、同居人という形で生活費もわずかに入る程度だろう。朔哉という同居人との生活に慣れた頃は俺達も『亜沙子がいつも幸せな顔をしてるならそれでいい』と思つてたのだが、当の亜沙子が最近様子が違うのだ。

『ネエ、龍平。私も最近疲れてきたよ。更年期かな？』って具合いに、弱音を吐くようになつた。確かに見た目は三十代だが亜沙子は間違いなく四十五半ば。離婚から必死で生活してきたから、そんな弱音を吐いても良い頃なのかも知れない。だかう考へても、同居人の朔哉が亜沙子を養えるようには思えないのだ。このままなら亜沙子はいつになつても楽な生活などありえない…。もちろん亜沙子が再婚もせず、このまま歳を取つたとしたら俺が亜沙子を養えるようになる覚悟はあるが、それは親子の関係でしかない。俺は亜沙子の事を大切してくれると再婚して欲しいと思つた。こんな風に語ると俺達の母、亜沙子は逞しくて男なんか物ともしないバリバリに思うかもしれないが、実は天然もかなりなもので、俺達子供にとっては心配で仕方ない親なのだ。

休みの日といえば家事をした後はゴロゴロ寝てばかりで、夕方近くに放送される各駅停車の旅みたいな番組をボ～つと見ながら『いいな～、誰か連れてつてくれないかな～』と毎週呴いている。なんたつて同居人の朔哉ときたら毎週のように劇団仲間や趣味仲間と出歩いていて、亜沙子を連れて何処かに行くなんて事はこれまで一度位しかなかつたのだ。休日の買い物に付き合う事もなく、亜沙子の相手は時間があれば俺の役目と決まつてきてる。亜沙子は同年代の仲良さそうな夫婦連れを見ては羨ましそうに溜め息をつく…そんな亜沙子を見てると『なんで朔哉と同居してるんだろう？』と疑問にな

る。

「龍平、お母さんは朔哉とはいつか別れると思つ。専業主婦になりたいよ…って言つた、意味が違つんだけね…働くのを辞めたいんじゃないくて、私の稼ぎがメインの生活から引退したいと思うんだよね、この頃…。勿論、あなた達三人がちゃんと自立してからの話だけれどね。朔哉と一緒にいたらそれは望めそうに無いもの…定年過ぎても働いてなきゃいけなそう…それどころか、私の年金を食い潰されそう」確かに、このままの生活が続けばそうなるだろつ。

朔哉が亜沙子を特別に大切にしているようにも、俺からは見えない。もともと亜沙子は体も丈夫な方では無かつた。俺が小さい頃は『具合が悪い』と休んでいることが度々あつた。離婚後はがむしやらに生活してきたから、そんな姿は見なかつたが、俺の高校生活も後一年となつて少し将来の事を考えるようになつたのかも知れない。いや、亜沙子自身が幸せになれる将来を考えて欲しいと俺も姉達も思つてゐる。

時々、離婚した親を逆恨みして親を殺したとか、事件を起こしたとかニュースで流れているが、俺も姉達も、一度も離婚したことを責めたことは無いし、亜沙子には苦労した分は絶対に幸せになつて欲しいと思っている。子供達が立派になるとか、孫の顔を見るとかの幸せでなく、亜沙子自身が幸せになつて欲しいのだ。せつかく、あの最低の男と離婚したのだからこそ…。

「ネエ朔哉、私はあなたを養つ氣持ちは無いのよ…専業主婦みたいになりたいわ…」

「…俺も養つてもらおうなんて思つてないよ、でも亜沙子を養う自信も無い…」

そんな会話が聞こえてきた。息子の俺としてはかなり気になる会話である。そんな会話から何日かたつて、朔哉は派遣の仕事が終わつた後からファミレスでバイト始めた。「『仕事に慣れてきたら正社員に成ることを考えていきませんか?』って言われたよ

夕食を食べながら、いつもよりハイテンションな感じで朔哉が言った。

「……それもいいんじやない？派遣会社で派遣社員でいるよう…
いぐら社会保険は加入しても、職場を転々としてるんじや……」
歯切れの悪い亜沙子の言葉遣いに不安を感じたのは俺だけじゃ無かつたと思つ。

「それにさ…朔哉もいつか結婚するだろ？」「奥さんになる人が不安になる働き方してるよりいいと思つわ…」

何か、意味しなな感じである。

「ネエ、何で急にバイトなの？」

怪しい雲行の会話を遮るように姉の瑞希姉ちゃんが口を挟んだ。少しホツとした。

「…ん？…お金無いからさ、お金になればいいだろ？家に入れるお金、少しあは増やせるしさ。」

まずい！亜沙子の顔色が変わった…会話を遮らないと俺達まで気まずくなる…

「体壊さないようにな、家中で一番体壊し易いのは朔哉君だからさ、気をつけね！」

瑞希姉ちゃんの言葉に亜沙子は言葉を飲み込んで食事の後片付けを始めた。俺は亜沙子の後ろ姿がとても寂しそうに見えた。朔哉なりに考えた行動と亜沙子の思いが背中合わせになつたような気がした。

* * * * *

離婚したばかりの頃、亜沙子は以前から知り合いだったテレビ局に勤めている健嗣さんによく相談にのつてもらっていた。健嗣さんはいつも冷静で適切なアドバイスを亜沙子に与えた。それがあつたから辛い事も乗り越えてこれたのかも知れない。頼れる人だった。
だが、我家の生活が安定してきた頃に健嗣さんは海外勤務を言いわたされ突然イラクに旅立つた。

「再婚するなら健嗣さんと思つてたんだけどな…行っちゃった」

姉の瑞希と紗香は、母親の再婚の覚悟はできていたらしい。俺はまだ中学生だったし、母親の再婚など全く思いもしなかった。『亜沙子は俺が守る』くらいの生意気な気持ちも確かにあった。

イラク戦争の渦中に旅立つた健嗣さんを思つてか、ニュースを食いりるように見ている亜沙子の姿を何回となく見ていた。俺もごく普通の男の子だから、恋をしている母親の姿を見るのは嫌だったし、父親は腐つても父親だと思っていた。

健嗣さんがイラクに行つてしまつた時は正直な話…『良かった』とさえ思つていた。

かと言つて、離婚してから亜沙子が俺達を邪険にしたことなど一度も無かつたし、どちらかと言えば俺達の為に亜沙子は色々な事を我慢していたのかも知れない。どんなに亜沙子を守ろうと思つても、子供はいくつになつても子供で恋人や夫の役目は果たせ無い。それは姉達から聞かされる話を理解出来るようになるまでに、俺の心の成長と一緒に少しずつ溶かれてきたのだと思う。健嗣さんがイラクへ行つてから、亜沙子は『今日は編集長のお伴』とか『今日は大学の教授とランチ』とか『車屋の社長と飲みに行く』とかと、よく出歩くようになつた。

そんな時でも俺達の食事の用意の手は抜かなかつたし、夜遅く帰つて來ても翌朝はちゃんと主婦の仕事をするし、お弁当も作り、会社を休む事も無かつた。そんなある日、朔哉が家にやつて來た。亜沙子に本当に三人の子供がいるかを確認したかつたらしい。30才を過ぎたばかりの朔哉は俺達にとつては馴染みやすく、すぐに打ち解けた。

突然、兄ができたような氣分だつた。その後、紗香姉ちゃんの短大進学と俺の高校進学を期に我家は住まいを引越すことになり、朔哉との同居が始まつたのだ。朔哉にすっかり馴染んでいた俺達は抵抗もなく受け入れたのだったが、引越しの最中に亜沙子が携帯を握り締めながら呆然と立ちつくしていたのを覚えている。

「健嗣さん…帰つて来てるんだ…」確かにやつ眩いた気がした。瑞希姉ちゃんが聞き返した。

「え？ 健嗣さんからのメールなの？」

「うん…帰つて来てるらしいわ…」

「で、どうするの？ 引越し。引越しはいいけど、朔哉君の同居、止めた方がよくなない？」

「ん…荷物、持つて来てるからそんなこと言えないよ。それに、この先どうなるかも分からない…」

そんな感じで朔哉と俺達家族の生活は一年前から始まった。今になつて思うのは、亜沙子の迷いと悩みはあの時から始まつていたのかも知れない。

* * * * *

朔哉との同居を始めて2度田の暮れあたりから亜沙子は『友達と遊んでくる』と一日中出掛けた事があるようになつた。『あなた達も大人になつたから、少々、遊んできてもいいでしょ？』って言われると、たまには羽田を外すのもいいんじゃないかと思えるように俺もなつっていた。『龍ちゃん、あのわ、お母さんが出掛ける時に会つてる友達つて、きっと健嗣さんだと想つんだよ…お母さん、迷つてるのかもね…』

「でもさ、お母さんの将来的な事を思つて、健嗣さんを選んで当たつ前と思わない？』

瑞希姉ちゃんと紗香姉ちゃんに言われた。俺の本音を言えば亜沙子を幸せにしてくれるなら健嗣さんでも朔哉でもいいけど、とにかく幸せになつて欲しい。いつも穏やかでいられる生活を『えてくれる人と結婚してくれたらそれでいい。

でも朔哉が同居しだしてから一年になるといつ事実は間違いなくあらるのだ。今ではもう、当たり前のように生活している。

『お金は無いのかもしれないけど…楽しく暮らしていくじゃないか

…『「これは俺の気持ちであつて、亜沙子の気持ちがどうに向かっているのかわからなかつた。

* * * * *

「朔ちゃん…朔ちゃんは亜沙子と結婚する気はあるの?」

ウルトラマンのゲームをしながら何となく聞いてみた。

「結婚か…自信ないんだよな…無責任に聞こえるかもしけないけど、養う自信が無いんだよ…」

何となく予想通りの応えだつた。

「じゃあ、こつまでうちで生活してるの? 聞いちゃまずいかな?」

「…出来るならずっとここにいたいけどね…亜沙ちゃんばかりじゃなくて、皆の事が大好きだからね…」

二年も一緒に生活している。もう昔からこの家族だったように生活してきたから、俺もこの言葉は当然だと思った。『なんでまた急に』って顔をして朔哉は首を傾げた。その後は俺も言葉がみつからず、二人でウルトラマンゲームに熱中した。

そんなこんなでの亜沙子の変化を朔哉が感じているかは別として、子供の俺達なりに感じていることは亜沙子に伝えておかなければならないだろうと瑞希姉ちゃんが言い出した。

姉ちゃん達は既に社会人で、彼氏もいて、自分達は近い将来的に、家から出て行く。残るのは俺だから『龍ちゃんはどうなればいいと思う?』なんて聞かれても今の生活から瑞希姉ちゃんや紗香姉ちゃんが抜ける事は想像できても、朔哉でなく健嗣さんが一緒に生活する事など今の俺には想像できないと言つのが本音だった。それに『子供が口出すことか?』みたいな気持ちもある。それどころか、朔哉は? 朔哉の気持ちはどうなんだら? あの歯切れの悪い会話を思い出した。

* * * * *

そんな子供達の心配や不安なんか亞沙子は気にしているのだらうか
…相変わらず樂天的な行動は変わらず…いや、一層みがきがかかっ
てきているようだ。

「やだなあ、先週より太ったみたいだわ…この服、先週は苦しくな
かつたのになんかキツいんだけど…いよいよ中年肥りかな」
いやいや『再婚したいなら肥るなよ、中年肥りなんか言つてんなよ。
肥るのは再婚でさしてからにしてくれよ』と思つた。

「ねえ紗香ちゃん、お母さんね、こことこ時々健嗣さんと会つて
たんだ…」

亞沙子はいつも本音は紗香姉ちゃんと話す。

「うん、何となくわかつてたよ。で、健嗣さんとはどうなの？」

ストレートに話を聞けるのも紗香姉ちゃんの特技だった。

「どうもなんないよ。人つてタイミングを外すとダメだね。健嗣さ
んと私は死ぬまでこれ以上もこれ以下もないと思つわ…」

「でも、ママは待つてたんでしょう？健嗣さんが帰つて来るのを…」
引っ越しのあの日、健嗣さんのメールを受け取つて呆然としてい
た亞沙子がいた事は間違いない。

「そうね…心のどこかで何時かは健嗣さんと…つて思つてたけどね
…健嗣さんがそんな気持ちはなくなつたみたいよ。時間つて気持
ちもタイミングも変えちゃうね。」

遠い目をして亞沙子は咳いてた。亞沙子の思い描く幸せがどんなも
のか子供の俺達には分からない。生活を共にしているのに結婚には
自信がない朔哉の気持ちも理解出来ない。結婚する気もない健嗣さ
んにふりまわされてる亞沙子…

「私ね、歳とつて一人になつても、皆に心配かけないよう生活出

来るように、定年まで頑張つて働くよ！それからね、お葬式も心配しなくていいよ。互助会の会員に入ってきたからね、契約の範囲で

全て納めてね。互助会の積立期間が終るまで死ねないわ（笑）」

強がりとも、決心とも思える言葉を妙に明るく亜沙子が言ったのは

一ヶ月ほど過ぎた頃だった。梅雨に入りそうな季節になっていた。

「あのむ…何だけど…俺、実はこの前オーディション受けてきたんだけどさ…」朔哉の突然の言葉に皆が注目した。

「いつ？何のオーディション？結果はいつわかるの？」

亜沙子が早口で聞き返した。

「うん、チョイ役：悪役なんだけどやつてみたくてね…ヒーロー物の悪役なんだ。」朔哉に亜沙子は『まだ遅くないよ、やりたい役があるならオーディション受けておいでよ』とよく言つてた。

「そつかあ…で結果はいつ分かるの？」

何故か俺もドキドキしながら聞いていた。

「今日、さつき帰つて来る途中で電話あつてね、行つて来るよ。」「行つて来るよってことは…使つてもらえるってこと？」

亜沙子が興奮気味に聞き返した。

「そうらしい。詳しくはとりあえず事務所で説明するからつてさ。明日東京の事務所に行つて来るよ。」

朔哉はそう言うと、黙々と食事を始めた。

「詳しいことわかつたら連絡すぐしてね。」

何となく皆がソワソワしながら、朔哉を見つめていた。

翌朝、朔哉は意氣揚々と家を出て行つた。

亜沙子は見送りながら

「また…一人になるかな…」

と呟いた。

その日は夜になつても朔哉からの連絡はなく、俺達もその事には触れないようにしていた。翌日の夕方、家に帰ると朔哉が荷造りをしていた。

「朔ちゃん、もう行くの？亜沙子に連絡したの？」

「そのまま行ってしまうのかと心配になつた。

「いや、今夜はいかないよ。明日行くから支度だけしておくれのぞ。

亜沙ちゃんに送つてもらいたい荷物もあるからね。」

そう言つと、まだ手を付けてないガンダムのプラモモデルを俺にさしだした。

「作るかい？」

朔哉から貰つغانダムのプラモモデルはこれで何体になるだろ？…俺は縦に首をふりながら聞いた。

「でさ、帰つて来るの？その撮影が終わつたらち、家に…」朔哉は間發を入れずに応えた。

「そうだね、仕事がなきや帰つて来るかな？でも、もう一度頑張つてみようかとも思つてるのも事実なんだ。」

亜沙子がここにいれば『やれるだけやつてみなよ』と言つのは間違いないだろ？『寂しくなるね…』と言いかけて止めた。

その日の夜は朔哉が絶賛する亜沙子の特製カレーを朔哉は美味そつに食べていた。

* * * * *

あれから2年…

俺は料理関係の専門学校を出て憧れのイタリア料理専門店に就職をした。亜沙子は相変わらず仕事に没頭し、休日はゴロゴロしながら旅番組を眺め『誰か連れてつてくれないかなあ』とぼやいてる。時々、健嗣さんと会つてゐるのも相変わらずみたいで、ただ進展はなさそうだという事はわかる。

朔哉は…チョイ役で時々テレビドラマで見かけるが、亜沙子は朔哉の姿を觀ると『こんないい男だったかな~』と毎回のように眩しそうに見つめている。朔哉が亜沙子に連絡をくれているかは全くわからないが、朔哉を旅立たせた事に後悔はしていないようだ。

そんな風に亜沙子は自分の感情を剥き出したとする事なく毎日を送っている。淡々と…

朔哉が帰つて来たのはそれから半年ほど過ぎた暮れも近い頃で、久々に見る朔哉は堂々としていて以前の家に同居していた頃の朔哉とは、かなり雰囲気が違つていた。

「胸を張つて背筋伸ばして堂々としててね。せつかく背が高いんだから凛とね！」

そう亜沙子は言つて、眩しそうに目を細めて朔哉を見つめた。

「ああ、亜沙ちゃんにいつもやつ言われてたから…意識してやつしてる。」

そう言つて笑つた顔は昔と変わらなかつた。

朔哉が出て行つた後もそのままにしていた荷物を整理しながら「また来てもまいいかい？」これが実家のような気がするんだ…」

と朔哉は言つた。

「私は貴方のお母さんじやないのよ…結婚願望の強い女なの。それがわかつてそつ言つのかしら？」

亜沙子が珍しく弱々しく言つた。朔哉はただ微笑んで頷いた。

二人の間だけで理解できるサインだつたのだろうか…

朔哉は最終の新幹線で帰つて行つた。

それ以来亜沙子は朔哉の名前を口に出していない。

俺の母親亜沙子はいい女だとつづく思つ。誰か、亜沙子と結婚してやつてくれないか！

(後書き)

両親が離婚して不幸だと思っている子供たちへ…
両親の離婚は不幸な事ではないと気づいて下さい。
親だって感情があるから苦恼もある。
離婚で一番苦しんでいるのは本人達だと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1460c/>

結婚してくれ

2010年10月11日14時04分発行